

ユスト高山右近の列福を願う

祈願ミサとシンポジウム開催される

2月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂にて、ユスト高山右近列福祈願ミサとシンポジウムが「現代に響く高山右近の霊性」をテーマに開催されました。大阪教区とカトリック中央協議会の列聖列福特別委員会(委員長・大塚喜直司教・京都教区)の共催で、右近研究の第一人者の溝部脩司教(前列聖列福特別委員会委員長)の講演、古楽器による右近時代の音楽の演奏、パネリスト4人を加えたパネルディスカッション、池長潤大阪教区大司教司式の列福祈願ミサを通して、約6百人の参加者は高山右近の列福を祈願しました。

溝部司教は基調講演で、「義の人」と「茶人」としての右近をテーマに話しました。ユストという洗礼名は「義人」という意味であり、神の義は自分を人のために明け渡すことで、高山右近は生涯を通して、多くの困難と試練に立たされながら自分の義を貫き通しました。溝部司教は、その生き方

を、主君織田信長に反旗を翻した荒木村重の間に立って、神に向かう必死の祈りの中で自分をすべて捨てて信長の前に立った「荒木村重事件」を例に説明しました。また、右近の時代、茶の湯は千利休を中心にその

形を整えていきました。利休の斬新な茶の湯はキリシタン大名を引きつけ、右近

は利休の弟子、七哲の筆頭になりました。右近の茶はその人生と同じように筋の通ったもので、利休の目指すところと通じるものがあつたのではないかと考察されました。

SAKAMOTO古楽コンソートによる、復元楽器を用いた右近の時代に演奏されていた可能性のある楽曲の演奏に続き、パネルディスカッションが行われました。

大塚司教を司会に、久保田典彦(プロテスタント阿武山福音自由教会、高山右近研究家)、後藤光男(京都教区九条教会、茶道家)、井藤暁子(郷土史家)、岡本稔(高槻教会、高山右近研究会)の4人のパネリストと溝部司教で、講演の内容を深めました。

要なときがあります。高山右近の列福運動を通して、私たちがも日常で苦しいことがあつても、楽になるためではなく、神の愛によつて乗り越えていく「現代の殉教」を生きる決意を新たにいたしました。しようとして語られました。

大阪教区ユスト高山右近列福運動推進委員会(委員長、川邨裕明神父)から、今後の運動として、J・ラウレス神父が著わした「高山右近の生涯」を、大阪教区全教会の協力で現代語に訳すプロジェクトの推進や

願ミサで説教に立った大塚司教は、殉教者の「死に方」ではなく、「生き方」に注目すべきであるとし、「現代の殉教」とは、神の愛によつて生きることに命を懸けることであり、福音的な生き方を貫くために手放す決意が必

会場となった大聖堂の後方には、右近ゆかりの地の写真展(撮影・島崎賢児・京都教区河原町教会)や愛久澤勇作の版画の展示(協力・岩本稔・京都教区大和八木教会)も行われ、参加者は熱心に見入っていました。

会から応募したボランティアによつて運営されました。70人以上の人が参加して、各部署に分かれて準備、当日の運営に当たりました。高山右近のことが好きでたまらないという人もいて、今後の運動を進める柱になりそうです。



今回の祈願ミサは、各協